

判することはたやすいが、その理念型そのものの検討を避けては通れないだろう。地域社会をフィールドとして、子どもも親も同じ市民として仲間と共に楽しい生活を創り楽しむ権利は独自に保障されるべき内容といえるという主張、このあまりに現実とかけ離れた理念をどう手練り寄せていくのか、地域の個性的な取り組みの中からその理念の骨格を作り上げていくことを合わせてしていく作業が求められている。最後に子どもにただ自由な時間と場所を与えれば、生き生きとした遊びが創出されるだろうか。ファシリテーターやプレー

リーダーと呼ばれる遊びを共に創造する専門家の存在がかなり重要に思う。それは公民館があっても社会教育主事がいないとそこには場所貸しの発想を超える共同の学びや地域づくりへの学びが生まれてこないのと同様である。

ゆとりの哲学は、じつは深い人間発達への洞察と人間的な連帯の中に導かれるものである。

学校教育もその延長上にあるものとして、地域との豊かなつながりの中で、子どもの学びを支えていってほしいと願わざるにはいられない。

田中萬年編著『仕事を学ぶ』 (実践教育訓練研究会、2004年3月)

明治大学 小林 繁

本書は、著者が教鞭をとっている職業能力開発大学校および短期大学校の学生向けに書かれたテキストである。しかし本書執筆の意図について、「この授業で学ぼうとしていることは、『仕事』とは人生の中で社会の中で、どのような意味を持つかを考え・学ぶことです」と最初に述べられてあるように、とりわけ今日の教育をめぐる問題を考える時、ここでの内容は以下のようにテキストの範疇を越えて教育、特に学校教育のあり方への問題提起を含め、きわめて示唆的な論点が提示されているといえる。

現在の学歴社会においては、上記のような学校ではいわゆる偏差値の序列のもとで入学した学生の中に、「職業」に対するマイナスイメージ（「暗い」「ダサイ」など）が根強くあり、本書ではそれを「誤った学校中心主義」学習の結果によるものであると断じ、こうした認識を学生からいかに払拭させるかについて多くのページを割いている。そして自分の夢を追っていくための希望の学びのあり方を学生にメッセージとして繰り返して提

示し、本田宗一郎をはじめ傑出した職人の例などを引きながらものづくりの意味と意義を説き、そこから大学校での学びの役割を強調するのである。それが例えば「新たな価値観の構築」と表現され、「学校的価値とは異なる新たな価値を自身自身で創っていく」課題として示される。

この「学校的価値」への著者の批判は鋭く、今日の「学力」観が「記憶」の優劣の競い合いに傾斜し、創意工夫や器用さ、経験といった要素、すなわち「知恵」としての「日常生活や家業を処理する才覚」を排除していることを問題にし、ものづくりの教育的意味について様々な例をあげながら論じられている。そしてこのように、これまでの学校が労働や職業に関する教育をないがしろにしてきたことの問題性は、今日の大学教育の現状を浮き彫りにすることで明らかとなる。

そのひとつの象徴が、いわゆるダブルスクールという現象であり、東京にある専門学校では、実に学生の45%余りがこのダブルスクール生であるという。また東京の職業能力開発施設（技術専門

校)の2000年度の「普通課程」修了者のうち、大学と大学院、短大および高等専門学校卒業者が53%余という数字には驚かされる。それらの問題を筆者は次のように指摘する。「職業を考えない『進学』教育の結果がこのような現象を生んでいるといえます。それでも大学進学は増加しています。わが国の学校『教育』が問題である理由はここにもあります。」(p.49)

さらに、こうした職業に関する教育の軽視という問題の根を今日の学校教育の制度とそれを形作ってきたわが国の学校教育の歴史に求める視点は、職業教育の重要性を唱った学校教育法の理念が事実上無視されていることの問題指摘につながり、あらためて戦後宮原誠一が唱えた「生産主義教育」、つまり「人間教育すなわち職業教育」という知見の意味と重要性が強調されるのである。

それゆえに、なぜ宮原の生産主義教育論はその後等閑視され、ほとんど無吟味のままにおかれてしまったのか。この著者の疑問は、高度経済成長後の能力主義教育がいわゆる普通教育重視へ傾く中で、教育的関心が普通高校へ集中することによって職業教育が一貫して軽視され、その結果普通教育だけが突出していくことの問題性を明らかにするとともに、それが先のダブルスクールという現象にあらわれてくることを強調するのである。

そしてこうした著者の問題把握は、フリーターという現象に焦点を当てることによってさらにリアリティを増す。フリーターの背景には、今日の若者雇用情勢の悪化やライフスタイルの多様化などといった側面はあるものの、そこでの基本要因は職業というものが安易に考えられていることの結果であり、その原因が職業について考えさせてこなかった学校教育にあるという指摘は、調査等から明らかにされているように、子どもは学年が上がるにしたがって職業観が希薄になる傾向が強

いという状況と重なる。それゆえ「将来の職業観が育たない学校教育の目的とは何かが問われています」(p.54)という課題提起に至るのである。

その点で、今日の学校教育を拒否している不登校の子どもたちを受け入れているフリースクールやフリースペースが仕事や就労への取り組みを展開するようになってきているということは、本書で言及されている学校教育をめぐる問題の具体的な証左であるということもできるのではないか。そしてこうした問題状況の打開の方向を考える上で、第10章に紹介されている諸外国での職業教育の制度や取り組み、とりわけ米国のハイスクールのカリキュラムやドイツのマイスター制度などの例は参考になるわけであるが、それは同時に、従来の普通教育と職業教育といった機械的な分け方に対して根本的な疑問を提示するものとなる。

周知のように、日本でも近年ものづくりへの関心が高まり、技術や技能の重要性が社会的に意識されてくる状況にあって、これまで紹介してきたような本書の内容は重要な意義と意味をもっていることができるのである。さらにいえば、それは、かつての総合技術教育の議論がソ連崩壊という情勢の中で葬り去られた大事な論点を再度掘り起こすとともに、社会教育における労働および職業教育の課題をあらためて提起することにもつながるだろう。

以上のような意味において本書は、一部正確さに欠く記述(例えば、不登校の主たる原因をいじめとしている点など)が見られるものの、全体として今日の教育に対する問題提起の書であり、同時にその問題の打開の方向を職業教育に求めているという点で説得力をもつ内容であるといえる。そうした点で「最も個性が出るのが職業に関する教育だ」(p.52)という指摘は重い。